

ピヤ、サパタ首都に入る

多くの革命の例に漏れず、メキシコ革命で最も血なまぐさい局面は、旧体制と戦っているときではなく、革命側の間で争いが起こったときであった。メキシコを呑み込んだ新しい内戦では、革命軍はウエルタ連邦軍指揮官に対して行ったより、はるかに厳しく残忍な仕打ちを同僚に対して行った。1913-14年の戦いで革命軍の志願兵は強制徴兵された戦意の無い連邦軍と戦ったが、今度は志願兵同士の衝突であった。長期に亘ったウエルタ戦では、個々の兵士が時には連邦軍から脱走して革命軍に投じた。また、捕虜となった連邦軍将校の中で、革命軍に加わるか、あるいは銃殺隊の前に立つかの選択を迫られたとき、ウエルタへの忠誠を証明しようとした者は少なかったが、隊長あるいは部隊が革命軍に転じた事は殆ど皆無であった。革命軍同士の争いでは、指揮官の個人的な理由、あるいは勝敗の予測により、敵軍に鞍替えすることが頻繁に起こった。²⁷

1914年の暮れ、革命分派同士の戦いが始まったとき、ピヤが間もなく易々と勝利するであろうと多くの人々が確信していた。ピヤは会議派が現実的に国を支配していることを示すため、メキシコ市への進軍を命じた。先遣隊はパブロ・ゴンザレス北東師団守備隊からなるカランサ軍を難なく一蹴した。意気消沈した残兵はカランサ軍が集中していたベラクルースへ、或いはまだカランサ軍が支配していた北西部へ逃げた。このとき既にアメリカ軍はベラクルースから撤退し、カランサ軍へ武器や軍需物資の引き渡しを完了していた。首都への途上ピヤが占領した村や町では人々が歓喜して迎えた。商店主たちは、カランサ軍は一銭も払わなかったことに憤っていた。ピヤ軍が到着してからはどの店も開けていた。ピヤは掠奪を硬く禁じて、物を購入した兵士は皆代金を支払った。

1914年11月28日、北部師団先発隊はメキシコ市郊外のタクバに到着した。彼らは先に進まず、その間にエミリアノ・サパタの南部解放軍が首都を占領した。ピヤはサパタの意向を確認する前には動こうとしなかった。サパタの次に首都に入ったのは大統領エウラリオ・グティエレスで、ひっそりと大統領官邸に入った。殆ど無名の大統領がメキシコ市に到着したときにはパレードも慶賀の群集も歓迎レセプションもなかった。ピヤの歓迎は対照的であった。南軍の司令官が待ち受けていたメキシコ市郊外のソチミルコでピヤとサパタの歴史的会談が行われた。最初の会議場は公立学校で、花を手にした生徒たちが二人の指導者を迎えた。八十キロはあるピヤはカジュアルなカーキーのズボンに厚手の茶色のセーター、サパタは対称的に六十キロそこそこ、大きなソンプレロと短い黒のコート、タイトな黒いメキシコのズボンを穿いた正装であった。²⁸

両者は大統領に成る野望はないことを明らかにし、政策を執行する内閣を慎重に選び、彼らに行政を一任することで合意した。土地改革問題以外で国政を左右する外交問題、特にアメリカとの関係、あるいは労働問題などには触れなかった。この会議で少しずつ明らかになったのは、サパタは自分の地域を守るだけの軍事的能力しか持たないことであった。彼の軍隊はモレロス州外で戦うことを望まず、メキシコの将来に決定的なインパクトを与

えるだけの軍事的力がなかった。一方、サパタはアヤラ計画に掲げた土地改革という国家的政策を推し進めようとしていた。

ビヤは逆に全国規模で戦える北部師団を持ちながら、掲げた社会的政策は自分の地域の為のものでしかなかった。彼の主張した土地改革は、中央政府の介入を許さず、地方議会で取り仕切るものであるとした。これら両者の違いは言外に仄めかされただけで、明確に述べられたものではなかった。ビヤは土地改革について大筋で合意し、アヤラ計画を原則で受け入れるとしたが、何時、どのように、誰が行うかについては討議されなかった。ビヤは地方からの観点で土地改革を考え、サパタは国家的観点で捉えていた。対称的に軍事面でビヤが全国制覇を考える一方で、サパタは南部解放軍の機構にも能力にも触れなかった。会議の後で行われた非公開の会談でも国家的な議題ではなく、もっぱら軍事的な責任範囲などが討議された。北部はビヤ、南部はサパタ、そして彼らはベラクルースへの共同作戦を展開することで一致した。²⁹

話し合いを終えた二人は数万の軍隊を先導し、多くの都民が歓呼するメキシコ市の目抜き通りをパレードした。彼らが大統領官邸にグティエレス大統領を表敬訪問した折、ビヤはふざけて大統領の椅子に座り、サパタはその横に座って写真を撮った。この写真はビヤがメキシコの実権を握った証として国内外で大きな反響を呼んだ。ビヤはこのとき彼の人生の頂点にいた。しかし僅か数ヵ月後、彼が大敗を喫すると予想する者は誰もいなかった。

30

27. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P433

28. Ibid. P434

29. Ibid. P436

30. Ibid. P437